梶田叡一著「教師力再興－優れた教師に満ち満ちた学校に」教育改革選書№.2、明治図書出版、2010 年 6 月刊を読む(5)

開示悟入の教育のために（５）

悟らしむる

１．（1）さて、「**悟らしむる**」ということですが、これは、**一応分かったこと、一応できるようになったことが深まっていって、その人なりの納得となる、ということ**です。
（2）**自分なりの腹の底からの「なるほど!」に支えられるようになること**です。
（3）**分かったこと、できるようになったことが、自分なりの意味を持ち、自分の実感の世界に位置づくこと**です。

２．（1）この点も、今の子どもに非常に欠けているものではないでしょうか。
（2）「素直ではあるけれど、どこか頼りない」とか、「物知りだけど、本当は分かっていない」とか、「上手に解説はするけれど、実際の行動となると全く駄目である」というのは、この「**悟**」が十分でないからではないか、と思います。

３．（1）この「**悟**」のところまで学習を深めていくためには、どうしても、**体験との結合**が必要になります。
（2）**自分自身の体験に照らし合わせて、実感として理解する**とか、**活動し体験しながら自分なりに体得する、といったこと**が大切になるでしょう。
（3）これと同時に、**子どもたちが自分にとっての「意味」をいつも問題にするという姿勢を持つこと**が必要となります。

４．（1）これは言い換えるならば、**主体的に学習する習慣をつけること**と言ってもいいでしょう。
（2）つまり、「これはこういうことなのだ」と言われたことをそのまま鵜呑みにして覚え込んでしまうとか、「これはこういう風にやりなさい」と言われたことをそのまま忠実にやってみるだけで自分なりの工夫は一切やってみようとしない、といったことでは、とても**自分なりの納得にまで深まる**わけにいかないのです。

５．（1）このため、具体的な学習活動のあり方として、**自分で課題を見つけて探求していく**とか、**自分の問題を作ってその解決を求めて取り組んでいく**とか、**自分なりの完成を目指して創意工夫を粘り強く積み重ねていく**とか、**自分で分かっていると思うことを自分なりに書き表していく**、といったものが重要になるでしょう。
（2）また、**自分のこれまでの体験に基づいてこういう事柄をどう考えるか、子どもたちにそれぞれ話をさせ、それをめぐって話し合いを進めいく**、といった活動もよいかもしれません。

6．(1)もちろん、授業でやることのすべてをここまで深めなくてはならない、というわけではありません。

(2)そんなことをやろうとしたら、時間もエネルギーも、たまったものではありません。実際問題として、不可能です。だから、大事なポイントだけに絞って「**悟**」までの深化を工夫するということです。したがって、教える側で、何については一応学習させておくだけでよいのか、何については本人の本当の納得と実感にまで深めておかないといけないのか、といった見分けがきちんとできなくてはならないでしょう。

7．(1)それに加えて、子どもが今、頭の先で分かっているだけなのか、それとも腹に落ちて分かっているのか、といった点について的確に見てとれることが必要になります。

(2)子どもが口先だけのキレイゴトを言っているのに、それをそのまま認めてしまったのでは、どうにもなりません。教師の期待するところを推察して、それをそのまま口にしているだけなのに、教師の方で「待ってました」とばかりにその発言を受け入れるのでは、どうにもなりません。

(3)教師自身が、本当に主体的に分かっていることと、一つの約束事を覚えただけという分かり方との区別を、自分の中で、自分の実感として分かっていなくてはならない、とも言えるのではないでしょうか。

8．(1)ベートーベンの音楽だから無条件に偉大であって、誰もが感動すべきである、と言わんばかりの指導があります。

(2)トルストイの小説だから、ボードレールの詩だから、ゴッホの絵だから、誰もが感動に打ち震えるべきだ、という素朴な信念で迫ってくる教師がいます。

(3)しかし、芸術は感性の問題だから、本当はそういうわけにはいきません。

(4)ベートーベンなんか、トルストイなんか、どこがいいのか全く分からない、という子どもがいても当然なのです。

(5)もちろん、もしも教師自身が本当に感動したというのなら、それを何とか伝えるべく話してみる、ということは必要でしょう。しかし、感動そのものを押しつけるわけにはいきません。

9．(1)こういった方面の学習には、一義的に定まる「正解」はないのです。

(2)銘々持ちの「正解」しかありません。

(3)つまり、**自分なりに本当に感動できる何かを求めて、自分なりの探求をしていかなくてはならない**のです。

(4)この点についての反省が抜けていますと、結局は、ベートーベンは「楽聖」で、模範的な音楽で、これを聴いて感動できないのは音楽的感性に問題があるからであって、…という約束事を覚えさせるだけの教育になってしまうでしょう。

P139 ～ 142

［コメント］

「悟」とは、ものごとの本質を心から「そうかこういうことだったのか」と「理解」すること。「理解」とは何かの本質に迫る梶田先生の「悟」の御説明。

－ 2012 年 10 月 30 日林　明夫記－